

## 如来寺

稲田草庵にいた親鸞は、板敷山を越え筑波の麓を通りながら石岡に出て、霞ヶ浦一帯に念仏布教をしていた。親鸞が初めて霞ヶ浦に足跡を記した時、一つの事件が起こった。

親鸞が常陸に入った頃、時を同じくして霞ヶ浦の湖中に怪しく光るものが見え始めた。その光は篝火や蠟燭の光とは異なって、透き通るような黄金色を発し、夜間でもそれを認めることができた。霞ヶ浦を漁場として生活を立てている漁師たちは、その不思議な光に驚き、またそれ以上に困惑した。というのも、湖中の光のため魚は逃げ隠れ、漁獲がめっきり減ったからである。湖岸の漁師たちの生活は当然窮迫してきた。だが、為す術もなく、手をこまねいているほかはなかった。

親鸞が常陸に入って1年後、建保3年(1215)3月14日のことである。春の夕陽が霞ヶ浦に沈む頃、白髪の老人が大きな浮木に乗って、美浦村木原の浮島という所に辿り着いた。不漁で湖面を眺めていた漁師たちは「何事か」と集まって来たが、その漁師たちに対して、老人はこう告げたのであった。

「われは鹿島明神なり。明日、親鸞聖人と申す末代の名僧知識がここをお通りになられる。汝等がかねがね恐れて入る湖底の光るものをご覧にいれ、ご済度を願うべし。ゆめゆめ疑うことなかれ。また、わしが乗ってきたこの浮木は天竺より渡来した名木である。これを聖人に献じたてまつれ。」

漁師たちはあまりのことで半信半疑であったが、驚いたことに翌日木原の浮島に一人の念仏聖が通りかかった。名を伺うと、老人が告げた親鸞と同一人物である。漁師たちは昨夕の出来事を親鸞に話した。親鸞は湖中の光をしばらく眺めていたが、

「魚網を乗せて船をその光る所に着けてくだされ。」

と言った。そして、光の真上に舟を着けると網を降ろした。しばらくして曳き上げる

と、湖中よりキラキラと光を発しながら一体の阿弥陀如来像が上ってきた。親鸞はこの仏像を「湖中感得の阿弥陀像」と名づけ、浮島に作った草庵に安置した。すると、不漁であった霞ヶ浦の漁場は、以前と同じように活気を呈し、豊漁となったのである。

さらに親鸞は、鹿島明神の化身である老人が残っていた浮木で、「旃檀香木浮足の太子像」という聖徳太子像を自ら彫刻して草庵に安置、霞ヶ浦の漁民のために念仏の法座を開いたのである。

この浮島の草庵の創建に尽力したのが、この一帯の領主片岡親綱であった。親綱は兄の信親が鹿島神宮の大宮司となった後、家名を継いでいたが、親鸞の奇瑞に触れ、また殺生を生業となす者でも、念仏信心を深めれば極楽浄土へ往けるという教えに触れて改心し、弟子となって乗然房領海の法名を受けたのであった。その際の間答歌がある。

(親綱)「よしあしも知らぬ難波のあま小舟、誓いの海によりて定めん」

(親鸞)「本願の海によりてのあま小舟、櫓もとらで乗りてしかなり」

浮島の草庵は如来寺と号し、柿岡に移って現在に至っている。(武田鏡村)